

大官大寺第4次(推定金堂跡)の調査

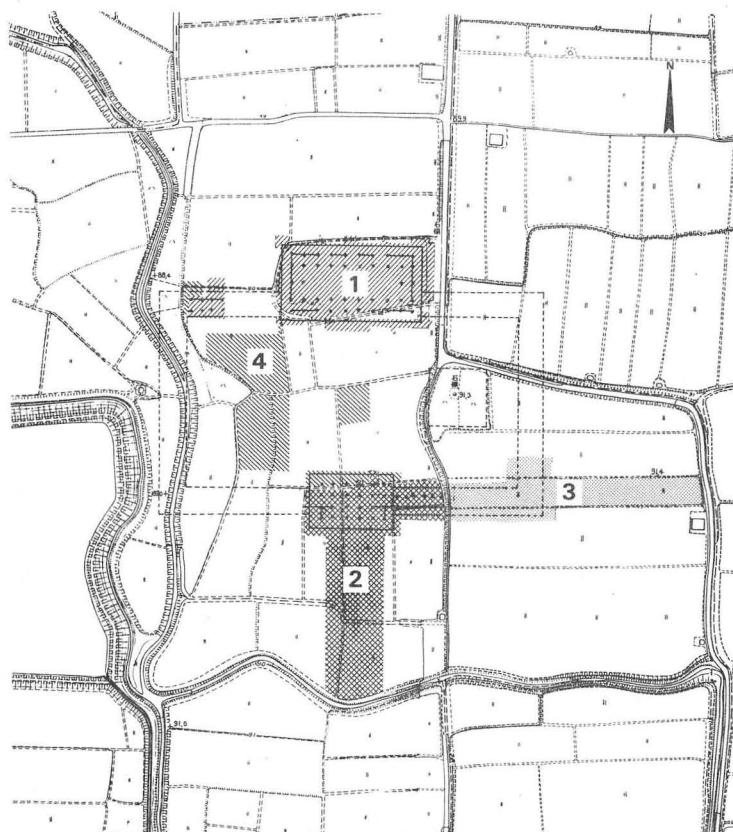
(昭和52年7月～昭和52年11月)

今年度は推定金堂跡を中心に調査し、この他第2次調査で一部未発掘であった中門の北側柱の部分も発掘した。

大官大寺の伽藍配置は昭和の初期まで金堂の前面に双塔が並立する薬師寺式と莫然と考えられていた。これに対し、精密な実地測量と文献考証によって南都諸大寺の復原に業績をあげてきた大岡実は昭和14年この寺跡を実施に測量し、明治初期の記録を検討して建物の平面規模を復原した。そして地名や、南都諸大寺の堂宇との比較を通して從来金堂とされてきた北側の巨大な基壇を講堂に比定し、講堂の前面に塔と金堂をおく法起寺式の伽藍配置を提倡したのである(「大官大寺の伽藍配置」建築史1－4)。

大岡説は測量の精密さと論証の手堅さによって以後定説の地位をしめてきた。

戦後になって、金堂を南面させる法起寺式は無理があるとして金堂を東面させる修正説が出されたが、講堂の南に塔と金堂を対置するという基本線において大岡説に異なるところはない



調査区位置図(1/3000)※数字は調査次数

かった。飛鳥藤原宮跡発掘調査部はこの定説にもとづき昭和49年以来、講堂跡、中門、南面回廊跡、東面回廊跡の調査を進めてきた。

〔金堂推定地〕 金堂跡については第1次調査において一部発掘を試みたが、トレントが小さかったためかこの時には確認できなかった。

金堂推定地の西半部は西を流れる水路にそって大きく抉られており遺構は破壊されていることが予想できた。今回の発掘は推定地の東半部に限り、金堂が東面していると見做してここに南北55m東西30mの発掘区を設けた。ここは所有者の異なる3枚の田圃に及ぶため、発掘区の形は畦畔にそって不整形であるが金堂のような建築物があればいずれかの発掘区に基壇の痕跡や足場穴は残るはずである。

現地形は東南が高く西北方向に向って傾斜している。これは発掘によって明らかになったところでは基層をなす礫層のレベルがそのまま現地形に反映しているのである。従って東南の発掘区は床土のすぐ下に礫が散っていて、この間に凝灰岩の残片や瓦の小片が混じていた。当初この凝灰岩の残片は南北に連るようにみえ、あるいは金堂基壇の東縁を示すかと思わせたが精査した結果、これらは中世以降の南北あるいは東西溝の中にはいりこんだものと分った。結局この区には中世の溝が掘られているだけで、金堂に関係する遺構は見当らず、礫層があるため下層遺構もなかった。西南の発掘区は西の水路によって浸蝕されていて基層の礫層が直接露呈していたため全面を調査することは中止し、一部を掘り下げて浸蝕の深さを確認するにとどめた。

西北の発掘区は第1次調査時は床土を外すと縄文式土器を含む暗褐色土層を切りこんだ中世以降の溝を数条検出したのであるが、今回も状況はまったく同じであった。この区のほぼ全面に縄文式土器を包含する暗褐色土が分布し、ここに弥生時代の溝や、大官大寺造営前の掘立柱建築や溝、それに中世以降の溝が掘りこまれていたが、金堂基壇の痕跡や足場穴などは見当らなかった。数度にわたり精査したが結果は同じであった。そこで全面的に削平されたこともあるものとして念のため講堂周辺の遺構面とのつながりをみるため講堂西南隅までトレントをいれたが、講堂基壇周囲の旧地表と同じレベルにあり、特に削平

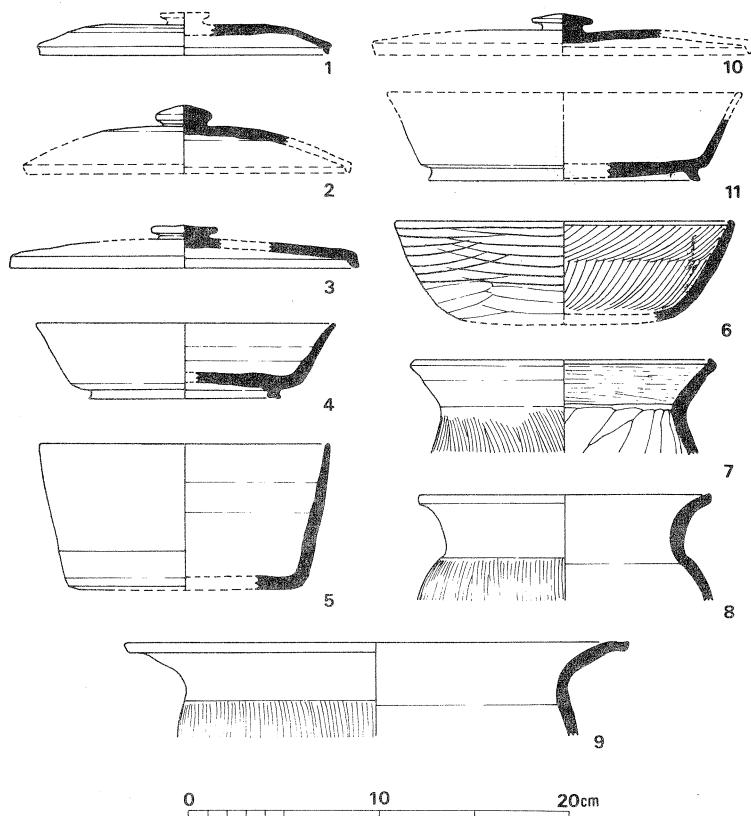
された痕跡もなかった。このように遺構面が著しく削平された徵証がないのに金堂の痕跡や足場穴がまったくなく、また講堂や中門、回廊の周囲に大量にみられた瓦堆積もなかったから、ここには金堂と考えられる基壇建築はなかつたという結論に達した。

大官大寺の伽藍配置に関する従来の説を否定する思いがけない結果を得たため、金堂が講堂の南面、内庭の中心部にある可能性を考え、ここを南北14m東西12m発掘した。しかし中世以降の溝と比較的新しい礎石落し込み穴を3個所検出し、その可能性がないことを確認した。

〔中門跡〕 中門跡は第2次調査によって5間×3間、桁行23.8m(79尺)梁間12.6m(42尺)の巨大な門が明らかとなっているが、北側柱列については発掘予定地外に及んだため礎石抜き取穴2を確認するにとどめた。今回は北側柱列から基壇まわりまで調査した。北側柱は礎石抜き取痕によって25間分検出したが遺構の残存状態は悪く礎石抜き取痕の底面がわづかに残っていた。足場穴はほぼ柱筋に検出し、うち4カ所には柱痕跡に焼土と炭化物が詰っていた。南側柱前面の足場穴は柱筋だけでなくその中間にもあったが、ここにはなく、軒まわりの足場も南側と北側では若干違いがあったことがうかがわれる。

〔下層遺構〕 下層遺構は金堂推定地の西北発掘区において大官大寺造営前の掘立柱建物・塀、溝、弥生時代の溝、縄文時代の土壙を検出した。

大官大寺造営前の遺構は方位からみてA・B二時期に分けられる。A期は主軸の方位が方眼方位に対し北で西に約18度振れる遺構であり、SA306, 305がある。SA306は方0.5m程度の小さな掘方の南北柵、7間分を検出。柱間は1.7m(5.7尺)から2.2m(7.3尺)を測る。SA305は掘方が方1mの柱穴で、建物と考え東側柱の推定位置を丹念に削り下げたが柱穴はなく、L字形の柵となった。B期は主軸がほぼ方眼方位に一致する遺構でSB302, SA303, SD304がある。南北棟建物SD302は桁行4間以上、梁間2間、柱間は1.4m(4.6尺)から2m(6.7尺)まで不揃いである。SA303はSB302の東4.5mにある南北柵、4間分を検出。柱間は2.1m(7尺)前後である。SD304はSD302とSA303の間の南北溝。幅約1.5m。南北17mを検出しさ



下層遺構出土土器(1/4) 1~9: SD 304

らに北側に続くと思われる。SD 304 出土土器は飛鳥藤原地区の土器編年 に従えば第IV期、藤原宮造営前の7世紀の第4四半期に相当し、大官大寺の造営時期の上限を示す資料である。

弥生時代の遺構は SD 310・311 がある。SD 310 はやや蛇行する南北溝。溝幅は一定

せず、南側は先細りになり消える。内部から畿内第V様式の土器が出土した。SD 311 は同時期の不整形な溝。

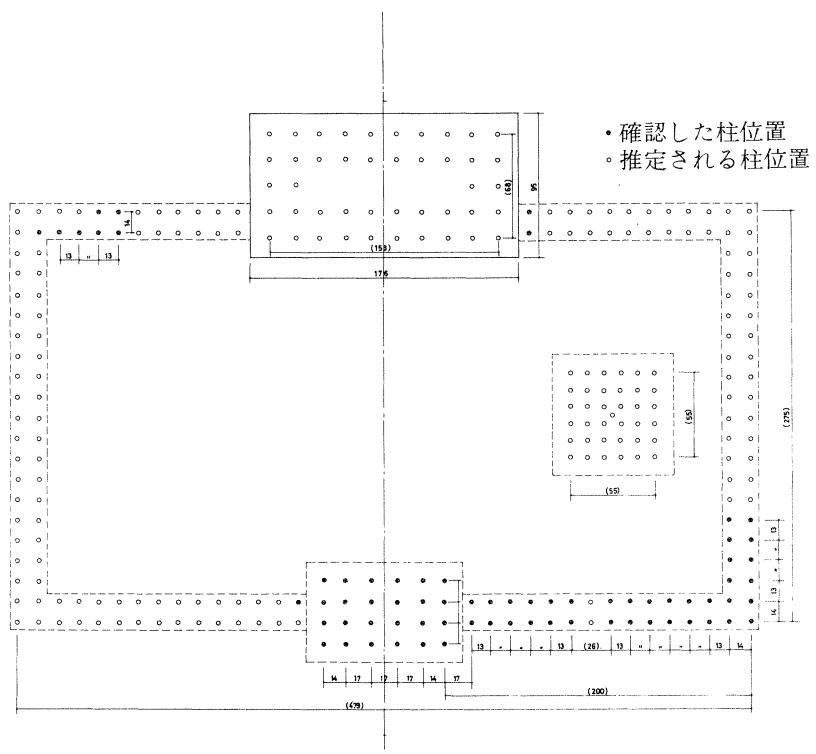
縄文時代の遺構はいずれも地山の黄灰砂層を掘りこんでいる不整形な土壙であり、時期は縄文時代中期末から後期初頭である。SK 313 は長径 1.8 m の浅い土壙。SK 315 は長径 3.5 m 短径 3 m 深さ 0.9 m 底がやや袋状となる。SK 320 は長径 3 m 短径 2.5 m の深さ 0.5 m 付近に河原石が投げこんであり、河原石の下に骨片を検出した。大形の土器破片を多数出土。SK 321 は浅く不整形な土壙でさらに南側の調査区域外に広がる。

〔まとめ〕 大官大寺の伽藍配置が従来の説とは異なるプランとなった結果新たに金堂がないことをどう解釈するかという問題が派生してきた。この問題はいまだちに結論づけられる性質の問題ではないがこれ迄の成果に基き一応の検討を加えておこう。

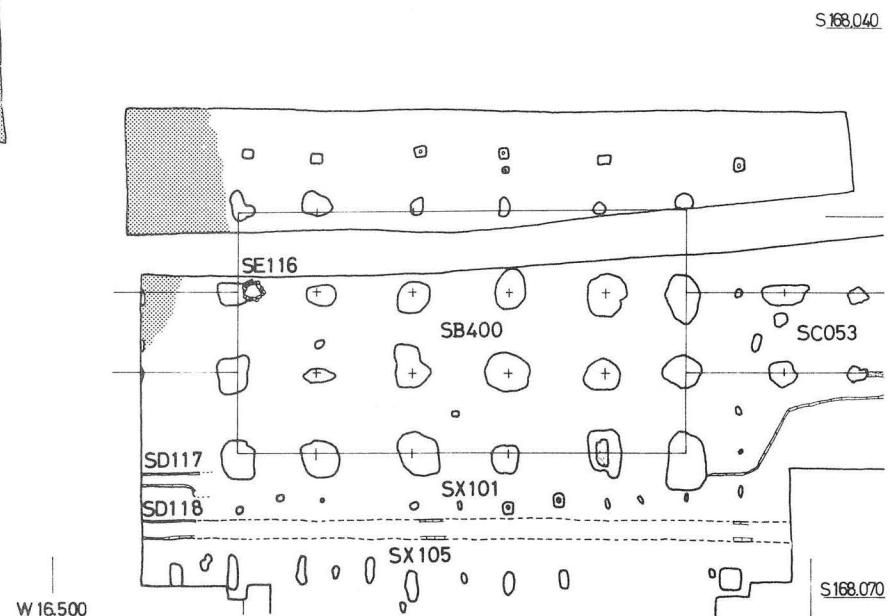
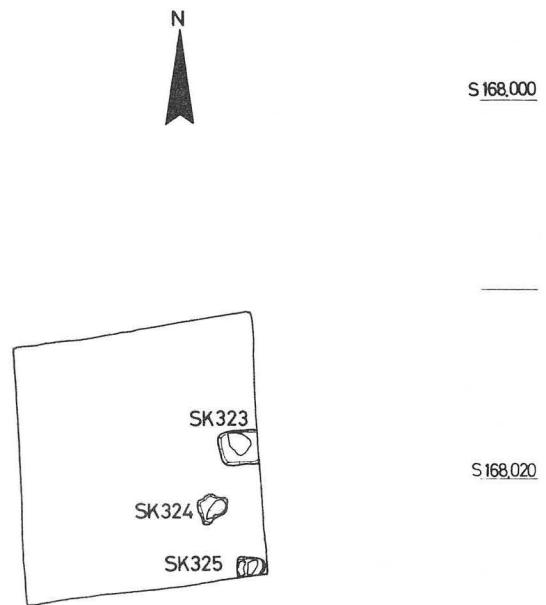
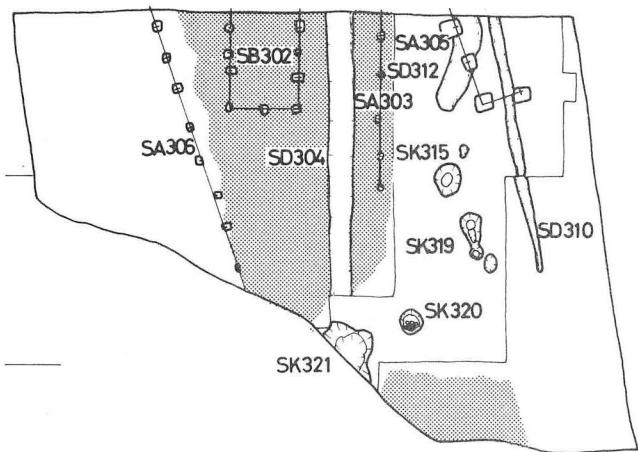
金堂はすでに明らかになっている堂宇に求めるか、新たに金堂のない伽藍を考えるかであろう。後にみるように金堂のない伽藍は考え難いので問題はこれ迄講堂としてきた基壇が金堂ではないかということに帰結する。この基壇（以下SB 100と称す）を講堂とされたのは大岡実であったが、大岡が講堂とした理由は二つあった。この地名が字「講堂」であること、実地測量の成果と明治時代に礎石の抜き跡を調査した本沢清三郎や岡本桃里の記録とから復原した建物平面の規模や性質が飛鳥・奈良時代の金堂の諸例とはことなるが白鳳・天平期の講堂の例とは著しく類似することにあった。

しかし第1次から第4次にわたる調査の結果、回廊に囲繞された内庭では一番早く建立されたのはSB 100であり、焼亡時には竣工していたと考えられる。これに対し、中門や回廊はかなり建造は進んでいたものの基壇化粧に至る以前に焼けたことが判明した。飛鳥白鳳期の寺院に関する考古学の成果は、伽藍中心部で最初に建立されるのは仏堂たる金堂、仏舍利を納める塔であり、講経の場である講堂はかなり遅れて建立されたことを示している。講堂が当初に造られた可能性がある唯一の例は唐招提寺があるが、これは奈良時代であるうえに平城宮期堂院の東朝集殿が施入されたという特殊事情によるとされる。

次に下層遺構の存在によって、現在の伽藍は持統朝を大幅に遡り得ず、持統朝の末年から文武朝に造営されたと考えられる。大安寺縁起にはその文武天皇が「九重塔を建て、金堂を作り建て、並に丈六像を敬い奉りてこれを造る」とある。また浅野清はかつて川原寺式の伽藍配置を考えたことがあり、SB 100を金堂に見做されている。このように考古学の成果と文献記録からみてSB 100を講堂とする大岡説はかならずしも絶対的とはいはず今後さらに検討が必要である。これとともにSB 100の背後にいかなる遺構があるのかによっても問題の解決は見い出せると思われ、今後の調査の進展に多くを期待したい。



大官大寺伽藍復原図 (1/1500・単位: 尺)



大官大寺金堂推定地・中門遺構配置図 (1/400)
(網目は礫層の分布)